

令和5年度生徒指導サポート実践校「特別活動の取組事例」

学校名	東広島市立三ツ城小学校	校長	向井 秀則	生徒指導主事	福田 秀範
取組事例名	『気持ちのよいあいさつを広げよう～めざせ！あいさつ大使』				

1 取組の設定

取組を実施する意図及びねらい	取組を通して育てたい児童生徒像
本校の児童は、教師や地域の方からの挨拶を受けてから挨拶を返す児童が多い。4月当初から校門で交通安全の見守りをしていても、自ら進んで挨拶してくる児童は少ない。また、朝教室に入るときも、児童同士で挨拶が交わされる姿もあまり見られなかった。そこで、挨拶のもつ意味を理解させ、率先して挨拶できる児童の育成を図った。	【人間関係形成】 挨拶を通して、様々な人々とつながることができる。 【社会参画】 挨拶を通して、主体性・積極性を高めている。 【自己表現】 自ら進んで挨拶をすることができる。



2 展開

取組の具体的内容	取組の創意工夫
○年に2回、「今月のチャレンジ」として挨拶月間を設け、生活委員会が中心となり、具体的な取組を企画する。 【4月の取組】 ①校門に生活委員会児童が立ち、挨拶を呼びかける。 ②教職員や生活委員会児童よりも率先して挨拶できた児童を、「あいさつ大使」に任命し、名札にシールを貼っていく。 ③学級担任にも協力を依頼し、朝登校してきた際に、率先して挨拶ができる児童にも「あいさつ大使」シールを貼っていく。 ④「あいさつ大使」に任命された児童には、登下校中や教室内外での挨拶を率先して行うように呼びかける。また、何名任命されたかを把握し、取組の成果と課題を振り返る。 【1月の取組】 ①校門に生活委員会児童が立ち、挨拶を呼びかける。 ②教職員や交通指導員よりも率先して挨拶できた児童を「あいさつ大使」に任命し、シールを渡す。 ③朝の登校場面だけでなく日常の学校生活で交わされる挨拶にも着目させ、率先して挨拶ができる児童にも教職員が「あいさつ大使」シールを渡していく。 ④「あいさつ大使」に任命された児童には、登下校中や教室内外での挨拶を率先して行うように呼びかける。また、何名任命されたかを把握し、取組の成果と課題を全校朝会で知らせ、2月からも継続して率先挨拶していくよう呼び掛ける。	児童にめあてをもたせるために ・「あいさつ大使」の取組は過去にも行われていたが、シールをもらえる基準が「明るい元気な声で挨拶できる児童」であった。本年度は「率先挨拶」をし、取組当初は基準を伏せて、なぜシールをもらえる人ともらえない人がいるのかを自ら考えさせる期間を設けた。 児童の意欲を高めるために ・シールを委員会の児童にデザインさせる機会を設けた。ICTを活用し、各々の図案をオンライン上で共有した。 ・2回目の取組ではシールに三ツ城小オリジナルキャラクターを使用し、より魅力のあるものにした。 ・シールのもらえる場面を学校生活全体に広げた。 児童の頑張りを認め、価値付けるために ・シールを名札に貼られることで、「あいさつ大使」になったという自覚を高め、進んで挨拶を広めようとする気持ちをもたせた。 ・学級ごとの「あいさつ大使」の達成率の途中経過を昼の放送で発表し、頑張りを価値づけ、「あいさつ大使」を増やして挨拶を当たり前にしようとする雰囲気づくりを行った。



3 成果と課題

生活委員会の児童による4月の挨拶運動では、まずは実態調査を行い、自分たちが挨拶をすると挨拶を返してくる児童は多いが、相手から自分たちに挨拶することが少ないということに児童が課題意識を高めた。そこから率先して挨拶出来る児童を増やしていこうと「あいさつ大使」シールの取組が始まり、4月は26%だったシール貼付児童を、1月の挨拶運動では46%にまで増やすことができた。シールをもらうことが目的でなく、日常的に率先挨拶を進んでできる児童を半数以上に増やしていくことが目標である。